

三代目歌右衛門最員の戯画摺物

神楽岡 幼子

文政三年に出版された一枚摺『芝翫年代記大成』（以下、『大成』とする）は年代記の形式を借り、三代目中村歌右衛門の活動とその周辺の情報を記録した一覧である。これには「諸君子贈芝翫戯画すりもの目ろく」という項目が設けられ、全部で五十一の歌右衛門に因む作品の名前が記される。当時、歌右衛門最員は活発な活動をしており、摺物はもちろん、出版物や貼込帖の作成など種々の歌右衛門に因む品々を残している。本稿では「諸君子贈芝翫戯画すりもの目ろく」に記された五十一点を検討することで、当時の歌右衛門最員の活動の一端を明らかにしたい。

〔資料1〕にあげたのは「諸君子贈芝翫戯画すりもの目ろく」の全部である。まず初めに、これら五十一点が全て実際に作成されたものであるのか、あるいは戯作として架空の名前が並べられたものなのかが問題となろう。また、「すりもの」は配り物の摺物のことと思われるが、「戯画」が指すものが何であるのかも検討を要する。

これらの品々がどのような形でちまたの歌右衛門最員に知られていたのかを検討することも、歌右衛門最員の活動を知ることにつながる。延々と解説を加えることになるが、煩を厭わず、五十一点全ての品について現在知り得た情報を報告したく思う。

〈1〉松年 芝翫艸

関大本『許多脚色帖』に松年肉筆の扇面が貼り込まれている。『芝翫帖』（文化十一年刊）にはその写しも載る。『最員花実知』（文化十二年刊）松年評に「芝翫艸といへるものを戯れにかきて送られしより 慣ちよつとしくはん松 翫芝草の類ひ 枝葉ひろがりしも松年先生のお手から」とあり、写本『芝翫隨筆』（文化十三年序）「芝翫最員玉つくし」には「同（芝翫）草名画の玉は 高らしいし 山中松年」とある。松年の歌右衛門に因む作品は種々知られているが、中でも芝翫艸が一番広く知られたものであったらしい。

〈1〉	松年	芝翫舛	〈18〉	忠臣くら七やく	〈35〉	七化たから船
〈2〉	同	芝翫玉	〈19〉	江戸みやけノウタ朱鍾爐	〈36〉	さるのゑ
〈3〉	同	芝翫蝶	〈20〉	朱鍾爐	〈37〉	つりかね
〈4〉	同	芝翫おだまき	〈21〉	芝翫八景	〈38〉	あふみくさ
〈5〉	芳中	翫舛	〈22〉	宮本無三四画馬	〈39〉	九変化
〈6〉	一花	翫芝舛	〈23〉	土佐又平	〈40〉	あさひじょ
〈7〉		芝翫梅	〈24〉	お三輪	〈41〉	百性弥作
〈8〉		芝翫蘭	〈25〉	松年 おみわ	〈42〉	恋飛脚
〈9〉		芝翫松	〈26〉	鎗伝授	〈43〉	もみじかり
〈10〉		芝翫舜	〈27〉	同 芦幸画	〈44〉	鷹野
〈11〉		芝翫鳥	〈28〉	春好 石橋	〈45〉	お袖
〈12〉		芝翫つる	〈29〉	芝翫国全図	〈46〉	晩春曲
〈13〉	松峰	つるひし船	〈30〉	ひいき道中記	〈47〉	三節紋づくし
〈14〉		芝翫紅葉	〈31〉	同図 たばこ入	〈48〉	花見まく
〈15〉		芝翫かきつはた	〈32〉	三ほう紋つくし	〈49〉	同
〈16〉		芝翫さゝ	〈33〉	松年 紋尽	〈50〉	日出の松
〈17〉		芝翫山水	〈34〉	同 つる	〈51〉	旭鶴

また、『役者拳角力』（文化十一年四月

刊）には「近頃は珍花珍木が咲ましたと

の事じや 先芝翫舛瑠寛朝がほ曙山海な

ぞと申て珍らしい花なぞが咲きました

（略）芝居好人様方には皆此珍花珍木の

写を所持被成るゝとの事でござり升れば

御手寄にて求て御覽被成ませ」とある。

「写を所持被成るゝ」とあるように、実

際に芝翫舛の図案はいろいろなところで

目にする事ができる。先に触れた『芝

翫隨筆』にも写されており、歌右衛門品

貞の一人である燕楽が所蔵する貼込帖

『見習てやはり芝翫帖』（以下、燕楽本

とする）には芳中画の芝翫草図の刷面が

貼り込まれている。さらに、それを写し

て楽しんだだけではなく、図案としても

いろいろな形で利用されていたようで、

演博本『許多脚色帖』に貼り込まれた歌

右衛門と中山一蝶を描いた肉筆（『許多

三一24-36）（注1）の背景にも描かれ



<f> <e> <d>



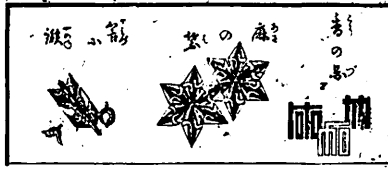
<c> <a>



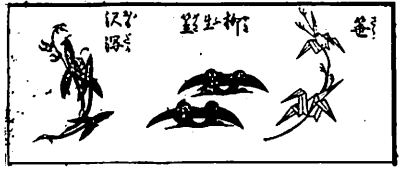
<l> <k> <j>



<i> <h> <g>



<r> <q> <p>



<o> <n> <m>

〔図1〕



<u> <t> <s>

ている。一枚摺『芝翫品眞浪花葵』にも「芝翫草うつし画すがた」として松年を筆頭に松峰、あし国、芦江、米山人という四人の絵師の名が並んでいる。芝翫艸は松年画の肉筆として有名な一点があり、それが写しとして、あるいは図案としてなど、様々な形で利用されて、ちまたに広がっていたのである。

以下の品々も摺物や単品の肉筆として伝わるだけではなく、利用のされ方は様々であったと思われる。また、摺物や単品の肉筆のように作品として完成されたものではなく、単純に芝翫に因む図案としてちまたに知れ渡ったようなものも含まれていると思われる。

〈2〉同 芝翫玉

『芝翫百一首玉文庫』（文政二年刊）には「当流伊達紋尺」として芝翫に因む図案が並べられているが〔図1〕（注2）、その中に「親玉」へbとして載る玉の

図がある。これと同じような図案で知られた肉筆ものもあったのであろうか。なお、一枚摺『芝瓶傍桜』（文化十二年刊）に「雷に出て雪より白き芝瓶玉」、「大成」「芝瓶産物所附」に「芝瓶玉 江戸ほり六歌仙」ともあり、詳細は不明ながら、ちまたに知られた図案であったと思われる。

〈3〉同 芝瓶蝶

未詳。

〈4〉同 芝瓶おだまき

燕楽本にはおだまきを描いた肉筆が三点貼り込まれている。ただし、松年の署名のあるものはない。『芝瓶随筆』にも写しと思われる絵が載り、苧巻の絵に羅月の狂歌が添えられるが、これも絵師名は記されない。松年の描いた代表的な芝瓶おだまきの図があり、それを真似ていろいろなところに描かれたものと思われる。

〈5〉芳中 瓶舛

『芝瓶選』に写しと思われる絵が載り、「芳中書」として狂歌が添えられる。燕楽本には亀游画の瓶舛の肉筆が貼り込まれており、瓶舛もちまたに知られた図案であったらしい。

〈6〉一花 瓶芝舛

小摺物。『芝瓶選』に貼り込まれ、蘭亭一花の名前が載る。『品貞花実知』一花評にも「蘭亭一花といへる名は昨年舛芝舛の摺物に

てヒイキとは世上へ聞え」と記された。先に引いた『品貞花実知』松年評に「瓶芝草」の記載もあったように、瓶芝舛の話題もちまたに知られていた。

〈7〉芝瓶梅

『芝瓶選』に写しと思われる絵が載る。祇園守の紋を梅の花に見立てた絵に李笑の句が添えられている。

〈8〉芝瓶蘭

燕楽本に棠洲画の蘭の図の扇面が貼り込まれている。これとは図案を異にするが、『玉文庫』の「当流伊達紋尽」にも「蘭の花」〈8〉の図が載る。「芝瓶蘭」と呼ぶべき図案がどれかは不明であるが、芝瓶蘭もちまたに知られた図案であったと思われる。

〈9〉芝瓶松

『芝瓶帖』にはその写しと思われる春郷画の松の絵が描かれ、芝瓶の句が添えられている。『品貞花実知』松年評に「しくはん松」の記載もあったように、芝瓶松の図案も知られていたらしい。また、図案は異なるが、『玉文庫』「当流伊達紋尽」には「光琳の松」〈9〉として松の図が載せられている。

〈10〉芝瓶舜

燕楽本には担夕画の朝顔の図の肉筆が貼り込まれている。葉が鶴の形で、蔓をたどると「しくわん」と読めるように描かれている。

燕楽本には春郷画の「飛鶴舞」図の扇面も貼り込まれている。これは花びらと葉が鶴の形をしたものである。「芝瓶選」にも写しと思われるものが載り、松年による朝顔の絵に狂歌発句が添えられる。「玉文庫」「当流伊達紋尺」にも「朝貞」(へ)の図が載る。「芝瓶舞」と呼ぶべき図案がどれかは不明であるが、芝瓶舞の図案もよく知られたものであったらしい。

〈11〉芝瓶鳥

関大本『許多』に肉筆が貼り込まれている。「芝瓶帖」にはその写しも載る。関大本『許多』の編者七文字屋こと歌賀家狂人鬼哉によるものである。

〈12〉芝瓶つる

燕楽本に棠洲画の日の出に飛鶴の図の扇面が貼り込まれている。これは飛鶴の群で「芝瓶」という字を形作ったものである。ただし、鶴の絵を図案化した絵は多く伝わり、ここで言う「芝瓶つる」がどれであるのかは決めがたい。

〈13〉松峰 つるひし鉋

未詳。

〈14〉芝瓶紅葉

燕楽本に探月画の楓の図の肉筆が貼り込まれている。葉の中に鶴が図案化されている。「玉文庫」の「当流伊達紋尺」にも「紅葉」

〈s〉の図が載っている。

〈15〉芝瓶かきつばた

燕楽本に芦ウ画の杜若の図の扇面が貼り込まれている。花が鶴の形になっている。「玉文庫」の「当流伊達紋尺」にも「杜若」(k)の図が載っている。

〈16〉芝瓶さゝ

『玉文庫』の「当流伊達紋尺」に「笹」(m)の図がある。これと同じような図案で紹介された肉筆ものでもあったのであろうか。

〈17〉芝瓶山水

未詳。

〈18〉忠臣くら七やく

摺物。文化十年十一月大坂中の芝居上演の「仮名手本忠臣蔵」に因む。演博本『許多』(三一—23—7—9)に貼り込まれている。また、原所蔵者不明ながら全体図の写真が演博に所蔵されている。

『畠屋花実知』芦国評に「七化の看板は芦国さんじやとの事で有たが忠臣くら七役の摺もの紫流軒川丸社中の狂歌も面白ふ画面もよふ出来ました」と評された。

〈19〉江戸みやけノウた朱鍾膺

摺物。関大本『許多』に貼り込まれている。「芝瓶帖」にはその写しが載り、作成の事情についても解説されている。「畠屋花実知」

百喜評に「一昨年の鍾馗の摺もの江戸みやげの歌びらき又此頃芝瓶
国一覽に洞露齋百喜と作名を記されました」と評された。

〈20〉朱鍾馗

『品眞花実知』武吉評に「武吉公は画をよく致され桃溪先生の門
人にて画名は桃里といひ豊橋社友の摺もの芝瓶丈の朱鍾馗よふか
れました」とあって、前項の百喜による朱鍾馗とは別に作られた摺
物もあったらしい。また、『芝瓶賞賛帖』には芳中画の朱鍾馗の肉
筆が貼り込まれている。

〈21〉芝瓶八景

『芝瓶節用百戲通』（文化十二年刊）に「舞台八景之図」として
芝瓶の演じた当たり役に因む景色が八図描かれている。これと同じ
ような図案で紹介された肉筆ものがあつたのであろうか。

〈22〉宮本無三四画馬

摺物。『品眞花実知』幸祿評に「芝瓶丈の江戸下りの節公長先生
が無三四の画の摺ものにまかう庵先生も句を出されました」と載る。
現物は所在不明。『芝瓶節用百戲通』に「絵馬の書方法」という項
目が設けられ、「宮本武三四の絵面なれば摺物にも絵馬にも両とう
に用ひてよし」として絵馬の絵が描かれている。『大成』にいうと
ころもこれと同じ図案であるのかもしれない。なお、絵馬に描かれ
た図案と同じ図案の宮本無三四を描いた肉筆の軸物も演劇博物館に

伝わっている（注3）。

〈23〉土佐又平

摺物。『役者書画帖』に貼り込まれている。文化十二年七月江戸
中村座上演の歌右衛門一世一代の興行「けいせい返魂香 吃のだん」
に因む。

〈24〉お三輪

小摺物。『役者書画帖』に貼り込まれている。文化十三年十一月
大坂角の芝居上演の「妹背山婦女庭訓」に因む。絵師名はない。燕
楽本には芦幸画のおみわの図の肉筆が貼り込まれている。ここで言
う「お三輪」がどれに当たるかは不明。

〈25〉松年 おみわ

未詳。

〈26〉鎗伝授

摺物。演博本『許多』（三一—26—17—18）に貼り込まれている。

芦国画。文化十三年正月大坂角の芝居上演の「伊賀越乗掛合羽」に
因む。

〈27〉同 芦幸画

摺物。燕楽本に貼り込まれている。〈26〉に同じく、文化十三年
正月大坂角の芝居上演の「伊賀越乗掛合羽」に因む。

〈28〉春好 石橋

小摺物。『役者書画帖』に貼り込まれている。文化十二年三月江戸中村座上演の「其九絵彩四季桜」に因む。

〈29〉芝翫全国

一枚摺。演博本『許多』(三二—28—62)および『西沢一鳳貼込帖』に貼り込まれている。晝鐘成作。『芝翫国一覽』(文化十二年刊)の元になった作である。

〈30〉ひいき道中記

一枚摺。『役者書画帖』および『保古帖』に貼り込まれている。

『品貞花実知』純和評に「芝翫道中記は片町の瓶八様の作じやとも純和様の作じやは共聞ました」と載る。

〈31〉同園 たばこ入

未詳。

〈32〉三はう紋つくし

未詳。

〈33〉松年 紋尺

現物の所在不明。『芝翫栗毛』(文化十一年刊)に山家の娘が大坂で「紋つくしはんこう」を買い求めたという描写がある。実際に出回っていた紋尺の一枚ものが存在したのであろう。

〈34〉同 つる

燕楽本に松年画の摺物で鶴や橋を描いたものが貼り込まれている

が、これ以外に鶴をメインに描いた作品もあつたのではないだろうか。

〈35〉七化たから船

摺物。関大本『許多』に貼り込まれている。文化十年正月大坂中の芝居上演の「けいせい繁夜話」の大切所作「慣ちよつと七化」に因む。『品貞花実知』専都評に「京源様は専都といひ又阿保大関と名のりて七化の七福神宝船のすり物よふ出来ました」と評された。

〈36〉さるのゑ

摺物。『芝翫賞賛帖』に貼り込まれている。『品貞花実知』白雀評に「いやみなき風流の摺物祖仙先生の猿の画に花王よ恋の歌右衛門の句はきつと承知く」と評された。

〈37〉つりかね

摺物。『芝翫帖』にその写しが載る。『品貞花実知』殺堂評に「昨年は釣かねの摺物に地こく長兵衛の替うたあぶみ艸の摺ものなとにて当りを取れし」と評された。

〈38〉あふみくさ

摺物。『芝翫帖』にその写しが載る。先に引いた『品貞花実知』殺堂評に「あぶみ艸の摺もの」の記載もあつたように、「あぶみ艸」の摺物も知られていたらしい。

〈39〉九変化

小摺物。燕楽本におよそ縦九センチ、横八センチの小摺物が九枚貼り込まれており、それぞれに九化に因む絵と発句が記される。文化十三年三月大坂角の芝居上演の「三月開嬉心船橋」の大切所作事

「其九絵彩四季桜」に因んだものである。燕楽本には春淡画および棠洲画の九化に因む図の扇面二面も貼り込まれ、燕楽本全五巻を収める木箱にも九化の図が描かれている。また、演博本『許多』（三一26―35―38）にも九化を描いた肉筆が貼り込まれている。九化に因んで作られたものは多く、現在知り得ない作品もあると思われる。ここで言う「九変化」に当たるものがどれなのかは決めに欠く。なお、演博本『許多』には九化と同筆と思われる七化の肉筆も貼り込まれている。

〈40〉あさひじょ

摺物。燕楽本に貼り込まれている。文化十二年、歌右衛門二度目の江戸下りからの榻坂を品屋連中はそれぞれに趣向を凝らして出迎えたが、中でも花王連中が行った手打は評判を呼んだという。「あさひじょ」は花王連中が行った「あさひ獅子」の唱歌を摺物にしたもので、『役者謎掛論』（文化十三年正月刊）にも「石橋の摺物を見升たきつい御しゆこう其抜文句を左にしるし升」として紹介されている。

〈41〉百性弥作

摺物。演博本『許多』（三一26―7）および『役者書画帖』に貼り込まれている。あし国画。文化十二年十一月大坂角の芝居上演の「太平記忠臣譚釈」に因む。

〈42〉恋飛脚

摺物。燕楽本に貼り込まれている。文化十三年二月大坂角の芝居上演の「恋飛脚大和往来」に因む。孫右衛門を描いた一枚と梅川と忠兵衛を描いた一枚の二枚からなる。演博本『許多』（三一26―22―23）には孫右衛門を描いた一枚と、包み紙であろうか、「恋飛脚」と記した一枚が貼り込まれている。

〈43〉もみじかり

摺物。演博本『許多』（三一25―73―75）に貼り込まれている。文化十二年七月江戸中村座上演の歌右衛門一世一代の興行予定「平惟茂凱陣紅葉 二挺つづみのだん」に因む（注4）。

〈44〉麿野

摺物。演博本『許多』（三一26―31―32）に貼り込まれている。芦幸画。文化十三年三月大坂角の芝居上演の「三月開嬉心船橋」に因む。

〈45〉お袖

摺物。燕楽本に貼り込まれている。芦国画。文化十三年三月大坂角の芝居上演の「三月開嬉心船橋」に因む。

〈46〉晩春曲

未詳。

〈47〉三節紋づくし

未詳。

〈48〉花見まく

〈49〉同

摺物。燕楽本、および演博本『許多』(三一26―33)に貼り込まれている。該当しそうなものは現在のところ右の一点のみしか知らないが、ほかにも存在したものと思われる。

〈50〉日出の松

未詳。

〈51〉旭鶴

未詳。

以上、全五十一点の内訳は、現物あるいはその話題が確認できる摺物は二十二点(〈6〉〈18〉〈19〉〈20〉〈22〉〈23〉〈24〉〈26〉〈27〉〈28〉〈35〉〈36〉〈37〉〈38〉〈39〉〈40〉〈41〉〈42〉〈43〉〈44〉〈45〉〈48〉)、一枚摺は二点(〈29〉〈30〉)、肉筆あるいはその意匠を想定できるものなど何らかの情報があつたもの十六点(〈1〉〈2〉〈4〉〈5〉〈7〉〈8〉〈9〉〈10〉〈11〉〈12〉〈14〉〈15〉〈16〉〈21〉〈33〉

〈34〉)、情報がないもの十一點(〈3〉〈13〉〈17〉〈25〉〈31〉〈32〉〈46〉〈47〉〈49〉〈50〉〈51〉)になる。名前からだけでは『大成』に記載されたものと同一であるかを確定することは難しいが、現況から知り得る範囲で推定を試みたものである。摺物が伝存しているうともそれと同内容の肉筆の存在も否定できず、また、肉筆で伝わるものは、それが特定の肉筆作品なのか、摺物の写しなのか、決定する材料に欠く。そのような問題は残るが、おおよその内容を捉えることはできるだろう。確認できないものも残ったが、「諸君子贈芝瓶戯画すりもの目ろく」はありそうな品々の名前を戯れに想像して並べた戯作ではなく、やはり全て実際に作られ、ちまたに知られていたものと思われる。現在何らかの形で確認できる点数と当時の最良の活発な活動を思うならば、あえて名前のみを創作する必要などなく、むしろどの作品をここに載せるかの取捨選択に頭を悩ませたことと思われる。

「諸君子贈芝瓶戯画すりもの目ろく」は摺物や一枚摺、単品の肉筆作品、さらには図案の類など種々の作品を含んだ一覽であった。「すりもの」と言っても、一枚の大奉書もあれば、二枚組の大奉書もあり、また、小摺物も種々見られた。一枚摺も「すりもの」に含まれている。「戯画」の意味するところも幅広い。絵師の名前の記されたものや、『芝瓶帖』に採用された芝瓶呻(1)や芝瓶鳥(11)

のように話題となる特定の肉筆も含まれているが、特定の肉筆のみならず、図案として個々の畠原が利用し、楽しむことのできるものも含まれるらしい。芝甌舛（へー）のように肉筆の役者絵の背景に添えられたり、写しとしてちまたに広がっていく例もある。芝甌舛（まきへー）や芝甌舛（へー）のように、別個の作品として同じ図案が利用された例もある。また、芝甌舛（へー）のように、一つの芝甌舛だけではなく、様々な芝甌舛のバリエーションのある例も見られた。

このように、摺物や単品の肉筆のように特定の作品として完成された形だけではなく、芝甌舛に因む図案としてちまたに知られたものも含まれることは特に注目すべきであろう。「諸君子贈芝甌舛戯画すりもの目ろく」に載る作品、特に「戯画」の類はいろいろな楽しまれ方をしていたと思われる。この目録に載らない作品も当然多く存在し、また、この目録に刺激を受けて、さらに楽しい「戯画」に知恵をしぼった畠原もいたことであろう。畠原の活動はどんどんと広がっていく。

また、「諸君子贈芝甌舛戯画すりもの目ろく」にはそれが摺物であるのか、肉筆の類であるのかを示さないが、肉筆であるか、摺物であるかの情報は重要ではなかったであろう。特定の一点を決定できないものもあったが、あえて、決定する必要もないのであろう。

『畠原花実知』を見るだけでもいくつもの摺物の話題を拾うことが

可能であり、ちまたに摺物の現物や噂が流通している。摺物と同様に、肉筆の一点ものや図案のようなものであっても畠原同士の交流のルートに乗って、情報が流通していたことが想像される。先にも引いた「役者拳角力」には「芝居好人様方には皆此珍花珍木の写を所持被成るゝとの事でござり升れば 御手寄にて求て御覽被成ませ」とあった。「御手寄にて」それを手に入れることが可能な環境であったからであろう。五十一の品々は決して一部の畠原同士の限られた世界で喜ばれたわけではなく、広く一般の人々にも提供されていたと思われる。

「諸君子贈芝甌舛戯画すりもの目ろく」として品々が公開されたことで、歌右衛門好きの当時の人々は、まだ見ぬ、知らない摺物などがあれば、伝を得て、それらの品を楽しむことができるようになる。詳しくは別稿を用意する予定であるが、『大成』はこれまでの畠原の活動記録であるとともに、活動を広く公開する役割も担っていると思われる。歌右衛門畠原が広くアピールしていたことは、例えば、関大本『許多』の文化十年の記事にもうかがえる。すなわち「笹瀬連中より角へは玉様四人紋附の盃を日／＼とみ圖にて見物へ是を出し また中の座へは芝甌舛所作事を七福神に見立しすりものを振圖もて贈り 猶またさる方より七化所作を文作りし吾妻の土産と名附し新歌（の）摺もの棧敷の方へ取次もてくはるなど其景気毫

末に尽しかたし」とあるように、七化たから船の摺物〈35〉も朱鍾
植の摺物〈20〉も芝居小屋で見物に対して配られたことがあったと
いう。歌右衛門品貞としてではなく、品貞連中としての行動である
が、外に向けられた品貞の活動の広がり想像することができるよ
うに思われる。

なお、五十一一点の作品の多くは文化十一年から十三年頃のもので
あるが、これは歌右衛門の江戸下りや帰坂に刺激を受けた結果であ
る。品貞たちは織や進物などで歌右衛門を後援することも当然行っ
ていたが、それだけでは満足しなかった。これらの品々が続々と作
られたのは品貞の興味が出版物や摺物を作成するという方向に盛り
上がっていたピークの時期であったからと見ることが出来る。写本
『役者更紗眼鏡』（文政三年）は歌右衛門に因む出版物の種類の豊
富さはほかの役者に比べ際だったものであることを言い、続けて、
「書物計じやない 替り毎に錦絵の似顔はいふに及はず 其時々
ヒイキ連から出るりつばな摺物に讚した発句狂歌」と摺物に関して
も指摘する。橋組からは「ソリヤ芝翫計りじやない 岡島屋でも同
し事じや」とのせりふも出るが、歌右衛門の錦絵や摺物は非常に多
く作られていた。さらに加えて、肉筆の作品も種々作られたことは
『大成』の「諸君子贈芝翫戯画すりの目ろく」で見たところであ
る。品貞が集まって情報交換をするような活動が広がり、また、そ

の情報を広く外に向けて公開していく。そういう環境が熟していた
時代といえよう。

〔注1〕

『日本庶民文化史料集成』（三一書房、一四卷・一九七
五年、一五卷・一九七六年）所収の影印に付された番
号を参考に記す。以下、演博本『許多脚色帖』を引く
ときは同様に処理した。

〔注2〕

関西大学図書館蔵。

〔注3〕

「上方歌舞伎資料展——三代目歌右衛門の周辺」（演劇
博物館）七五号、一九九六年三月）参照。

〔注4〕

歌右衛門一世一代の興行の実態については赤間亮氏「歌
舞伎における当座性——替興行と統興行——」（講座日
本の伝承文学第六巻 芸能伝承の世界）、三弥井書店、
一九九九年）参照。

〔付記〕

資料の掲載を許可下さった関西大学図書館に厚く御礼申
し上げます。

（かぐらおか ようこ／本学非常勤講師）